

(様式4)

富山県立富山中部高等学校 平成28年度学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

「学力の向上－アクションプラン1－」の②テストの見直しと自主的な学習計画作成では、テストを見直す意識は高まったものの復習の実践意識は65%にとどまり目標の達成には至らなかった。また「進路意識の高揚と進路希望の実現－アクションプラン2－」の②希望する進路の実現を果たした生徒の割合は目標50%以上に対して46%にとどまった。「探究力・自己発信力の育成－アクションプラン5－」の①－2ルーブリック評価、②－1英語力の伸長でも目標には届かなかった。しかしながら「学力の向上－アクションプラン1－」の①互見授業・教科別授業研究会の実施回数、「進路意識の高揚と進路希望の実現－アクションプラン2－」の①大学探訪・進路講演会での満足度、「読書指導・体力の向上－アクションプラン3－」の①広報活動・読書指導、②持久走での自己記録更新、「学校行事・部活動の充実－アクションプラン4－」の①体育大会での充実感、②部活動での充実感、「探究力」「科学的思考力」「自己発信力」の育成－アクションプラン5－」の①－1野外実習・大学実習の満足度、②－2海外研修での参加生徒の充実感・保護者の肯定感については数値目標を達成した。

学力向上の重点課題「テストの見直し」については、今年度3年生と2年生において進学模試・校内実力テスト直後に「テスト解説授業」を行いその定着をはかった。また「自主的な学習計画」については、一昨年度から、週末を中心に課していた「均質・一斉の提出課題」を極力精選し、個に応じた主体的な家庭学習を充実させる指導を推進してきているが、授業の工夫や選択課題を充実させるなど、今後とも生徒一人一人がより自主的・主体的に家庭学習に取り組めるよう工夫していく必要がある。さらに今年度は学力の充実を目標として新たに「学力向上対策委員会」を設置し各教科の授業改善に取り組むとともに、各学年・クラス担任とも連携し、学力向上対策委員会で検討した方策を個々の生徒への面接に生かしたことも大きな前進であった。

一方、スーパーサイエンスハイスクール事業は3年目となり、探究学習の中心となる「課題研究」を充実するため、その基礎となる1年次の「基幹探究」に、探究力（科学的思考力・表現力）の育成をめざしたプログラム（探究モジュール）を導入して改善をはかった。また「課題研究」の評価のために取り入れた「ルーブリックによる評価」も工夫・改良され「課題研究」の質の向上・充実に繋がっている。

大学実習・野外実習等でも、各実習の目標を明確化することで充実をはかった。アメリカ研修やオーストラリア研修も計画通りに実施でき、大学実習・野外実習の満足度は平均93%、中国遼寧省東北育才学校訪問も含めた海外研修の充実感・肯定感も94%となり、本校のSSH事業は全校体制で着実に前進し大きな成果を上げていると考えられる。

今後とも生徒・保護者・地域・社会の期待に応え「日本を代表する優れた人材の輩出校であり続ける」ために「計画・実行・検証」の学校評価システムを確立し、充実した教育活動を展開していきたい。

7 次年度に向けての課題と方策

スーパーサイエンスハイスクール事業が4年目を迎えるが、「課題研究」を中心とした探究的な学習活動を一層普及充実させることに加え、卒業生の進路結果を踏まえて生徒の学習意欲を高める学習指導や高い意識を持たせる進路指導についてもさらに検討を加えていきたい。

生徒の学力向上を目ざすことはもちろん、学校行事や部活動の充実を継続してはかり、健全な心身・優れた知性・豊かな情操を培い民主的で自主性・創造性に満ちた人間の育成に努めていきたい。

8 学校アクションプラン

(様式5)

平成28年度 富山中部高等学校アクションプラン - 1 -		
重点項目	学力の向上	
重点課題	①授業の水準を高める。 ②生徒がテスト等で学力を自己分析し、主体的に学習を進めることができるよう指導する。	
現状	①授業力の向上を目指して互見授業等を行い、教科別授業研究会の充実に努めている。 ②課題をこなすことに終始し、テストによる学力分析と事後対策が不十分な生徒が多い。	
達成目標	①互見授業を行い、授業力の向上を図るための教科別授業研究会の実施回数	②各種テストの見直しを行い、その後の学習計画を自主的に作成・修正し実践できた生徒の割合（学習アンケートによる数字）
	各教科年間2回以上	80%以上
方策	<ul style="list-style-type: none"> ○互見授業を全教員に対し公開する。 ○互見授業終了後、教科別授業研究会を開催し、3年間を見通した指導法を築き、指導目標を共有する。 ○定期的に生徒の学力や学習実態を分析し、授業方法の改善を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○読解力・思考力・判断力・表現力等を育むような質の高いテスト作りに努める。 ○校内模試においてテスト解説授業を実施しテストを見直す意識を高めると共にその後の学習の指針を示す。 ○テストの見直しにより、学習活動におけるPDCAサイクルの徹底を図る。 ○教師の面談力を上げ担任や教科担当者による個別指導の充実を図る。 ○個々の学力に応じた教材について研究開発をさらに進める。 ○新入生合宿で高校での学習法をしっかりと身につけさせる。
達成度	各教科年間2回以上を実施した。	<ul style="list-style-type: none"> ○テストを見直す意識が「強くなった」または「強くなった教科もある」と答えた生徒 80.0% ○テストでできなかった分野の復習を学習計画に取り入れ実践しようとしている生徒 64.7%
具体的な取組状況	《互見授業》 1学期と2学期に各教科で互見授業を実施した。授業実施後には、教科別授業研究会を持ち、授業力向上に向けた指導法の研究を行った。また、多くの教員が、自分の専門教科以外の授業も積極的に見学し、指導の参考にした。	
	《テストの見直し、自主的な学習計画》 1年 <ul style="list-style-type: none"> ・英語と数学でテスト後の見直しを課題として課した。英語では見直し用の"Self Edition Sheet"を配布して間違っただ箇所を直して提出、数学ではテスト返却後の週末課題に書き直しを必須としてノートに再解答して提出させた。 ・自主的な学習を促すため、長期休業中の課題は「必修課題」と「自主課題」を設定した。長期休業中の学習計画については計画立案後と休業明けに担任との面接を設け、自主的な学習を自己評価させた。数学では週末課題でも自主的な学習を促すような工夫を施した。 	
	2年 <ul style="list-style-type: none"> ・各教科で「書き直しプリント（数学）」「確認ポイントの指示・返却答案を用いた学習方法のアドバイス（国語）」「再テストによる確認（数学・物理）」などの指導を行った。 ・第4回(11月)・第5回(1月)の実力テスト後にテスト解説授業を行った。 ・自主的な学習を促すため、長期休業中において全員一律の「必修課題」の量を減らし、「自主課題」で取り組む推薦教材を長期休業前に紹介した。なお、学習計画にあたっては、担任との面接をしっかりと行った。 ・体育大会以降、国語、英語、数学で添削指導や難関大対策講座を行った。 	
	3年 <ul style="list-style-type: none"> ・各進学模試終了後テスト解説授業を行い、テストの見直しを図った。進学模試や定期考査に 	

	<p>において各教科で講評プリントを配布しP D C Aサイクルでの学習を指導してきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏期休業中の課題は、必修課題と自主課題を定めているが、自主課題を重視した。期末考査終了後に大学別に学習ガイダンスを行い計画的に学習するように指導した。7月、9月～12月に難関大学講座や基礎講座を設け、学習支援を行った。 ・担任による面談を積極的に行った。特に難関大学を目指す生徒については、学力向上対策委員会との連携による指導を行った。
評価	<p>《互見授業》</p> <p>A 各教科において2回以上の互見授業と教科別協議会が実施され、その概要が報告されており、授業方法の改善が検討されている。</p>
	<p>《テストの見直し、自主的な学習計画》</p> <p>1年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テストの見直しを課題として課している英語と数学では、テスト終了後に再度解き直しをしている生徒が他の教科よりも割合が高かった。またできなかった分野をその後の学習計画に取り入れる生徒の割合でも数学は他の教科よりもやや高かった。
	<p>B</p> <p>2年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1月に実施したアンケートでは、テスト解説授業について「ためになっている」と「少しためになっている」をあわせ97%であった。テスト後の見直しは、ほとんどの生徒が必要だと感じているが、次の課題や予習等で忙しく、十分に時間が取れないと答えている生徒が多い。 ・長期休業中の学習を計画通りできない生徒は依然多いが、中には過去の失敗したことを糧に強い意志で臨むようになりしっかり学習できた生徒も増えている。(計画を立てて失敗を経験した成果であると考えている。) <p>3年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テストを見直す意識が強くなった生徒の割合は86%、進学模試後の解説授業がためになっている生徒の割合は85%であった。教科別で見ると、できなかった問題を見直したり、その後の学習計画に取り入れている教科は理数系教科が多い。 ・難関大学講座の実施により、学力の向上を図るのみならず、同じ志を持った生徒同士の切磋琢磨する環境が醸成され、生徒の意識改革が進んだ。
学校評議員の意見	<p>《互見授業》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科別授業研究会では、指導法に関する工夫や疑問、悩みなど率直な意見交換がなされるよう望む。 ・先生方の努力を評価したい。 ・互見授業を行うだけでなく、毎年度研究テーマをきめて実施していくとより効果的になる。
	<p>《テストの見直し、自主的な学習計画》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒にとって時間的に負担をかけ過ぎないように「出題の意図」「解答のポイント」だけを教えるにとどめ、自主的な学習を促すようにするとよいのではないかと思う。 ・解説するとき参考となる例題なども添えるとよい。 ・弱点を減らすという意味ではテストの見直しは大いに効果がある。
次年度へ向けての課題	<p>《互見授業》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の学力向上に向けて、本校の授業をどう改善していかなければならないのかを今一度問いかけ、明確な目的意識やテーマを持って実施できるような体制を考えなければならない。また、教科によっては教員数が少ないため、見学者が非常に少なかったケースがあった。実施方法などを再検討する必要がある。
	<p>《テストの見直し、自主的な学習計画》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学年ともに、テスト後の見直しについては、「努力はするが、次の課題や予習等で忙しく、十分に時間が取れない」と答えている生徒が多い。生徒の学習実態をより詳細に把握し、それぞれの時期において今何をさせるべきかを再確認するシステムが必要である。自主的な学習をする時間を確保できるように、「与えすぎず、奪いすぎず」各教科間でもっと課題の量と内容の調整をしなければならない。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

平成28年度 富山中部高等学校アクションプラン		－ 2 －
重点項目	進路意識の高揚と進路希望の実現	
重点課題	①自己の将来像に連なる進路意識を醸成し、進路希望の実現を図る。 ②より難関を目指す進学意識を育成する。	
現状	①全員が大学への進学を希望している。 ①大学・企業と連携した探究的な学習活動・体験の機会を活用する工夫が必要である。 ②自分の夢や希望を具現化するために意欲的に情報を収集し活用する姿勢に欠け、進路選択が遅れる生徒が増加傾向にある。	
達成目標	①大学探訪・進路講演会に満足した生徒の割合 大学探訪 … 90%以上 進路講演会 … 80%以上	②希望する進路の実現を果たした生徒の割合 第1志望大学の合格率 … 50%以上
方策	○将来の社会的・職業的自立に向けた一人一人のキャリア発達を促すために1、2学年の生徒に対し進路講演会を行う。事前に希望を集約して要望の多い分野から講師を招き10分野以上の分科会を設置し実施する。また生徒が具体的に進路を考えられるように、講師は生徒にとって身近な存在として本校卒業生を主に依頼する。 ○大学受験と大学生活を具体的にイメージさせるために本校卒業生を招き、大学生に学会を2学年で行う。	○面接指導や学年集会、および進路に関する行事を通して、早い時期から高い進路意識を持たせるよう指導する。また、3学年では個別指導を特に強化し、生徒一人一人が志望大学の要求する学力に到達するように努める。 ○SSH等を通し探究的な学習活動・体験の機会を増やし、大学で何をするかについて具体的なイメージを抱かせる。
達成度	・大学探訪 (2年) 93% ・進路講演会 (1・2年) 86%	第1志望校の合格率 (46%)
具体的な取組状況	<p>1年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年生と合同で、社会の様々な分野で活躍されている卒業生を招いて、進路講演会を実施した。事前アンケートを参考に法律、行政、経済、貿易、教育、理工、薬学、医学、農学等の分野から15分科会を設定し、生徒は希望する2分野の講演を聴いた。 ・探究科学科では、立山実習、能登臨海実習、社会施設見学、ノーベル賞フォーラムへの出席などを通して探究心を養うとともに、進路意識を高めることができた。 ・国際人育成と科学力養成を目的に、3月にはオーストラリア研修およびイングリッシュ・サイエンスキャンプを予定している。 <p>2年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学年懇談会(5月)において大学入試の概要等を伝えた。 ・東京方面と金沢大学への大学探訪を実施した。東京方面については、東京大学オープンキャンパスの日程にあわせ、8月3日～4日の1泊2日で実施(昨年度の評議委員会における「次年度へ向けての課題」を踏まえて)し、215名が参加した。一橋大学、お茶の水女子大学も見学できるようにした。また、外務省、国土交通省などの官庁やサントリー、旭化成、花王などの民間企業の見学をOBの協力を得て行った。宿泊先ではOB・OGによる懇談会を実施した。金沢大学はオープンキャンパスに100名が参加した。 ・社会の様々な分野で活躍されている卒業生を招き、進路講演会を1学年と合同で10月8日に実施した。(昨年の評議委員会における「評議員の意見」「次年度へ向けての課題」を踏まえて)事前アンケートを参考に法律、行政、経済、貿易、教育、理工、薬学、医学、農学等の分野から15分科会を設定し、生徒は希望する2分野の講演を聴いた。 ・生徒に「とやまの魅力」を発信できる力を身につけてもらいたいと考え、地方創生セミナーを行った。県地域振興課長から「とやまの魅力」について講演していただいたり、県内企業の方々から富山の企業として社会に果たす役割、どのような人材を望むかなどを話していただいた。 ・夏期休業期間を利用して、東京大学・富山大学・富山県立大学で実験実習を行ったり、米国研修を実施するなど、進路意識高揚につなげた。 	

	<p>3年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6・7月に大学別の学習ガイダンスを実施した。成績上位者を対象に難関大学講座を開講しより高い進路志望を持ち続けさせ、発展的な学習に取り組ませた。同時に「国公立二次対策講座」や「基礎講座」を開設し、様々な学力層に対応する指導を心がけた。 ・こまめな面接指導、個別指導を通じて、各生徒の進路指導に努めた。 ・今年度の生徒は「第1志望をあきらめない」精神のもと志望が非常に高かった。 ・全教科において教員全員で分担し個別大学添削指導を行ったり、読書の時間を利用した小論文対策演習を実施するなど、生徒一人一人の進路実現を図った。 ・進学模試や定期考査を意識して、P D C Aサイクルでの学習を指導してきた。
<p>評価</p>	<p>A</p> <p>《大学探訪》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京方面の大学探訪は、実施後明らかに進路意識が高まり、非常に有意義な訪問であった。今年度は昨年度までと時期・内容ともに大きく変更した。ホテルでの『東大生と語る会（O B ・ O G との懇談会）』は従来通りの形で行った。大学生活や学習方法を学ぶ絶好の機会であり、この大学探訪の核であると考えている。企業見学は大学の先を見ることができて良かった。 ・金沢大学は学校で一括申込みをし実施した。東北大学や富山大学等もオープンキャンパスの自主的参加を促したこともあり、多くの生徒が参加し貴重な体験をした。 <p>《進路講演会》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の進路希望を参考に文系・理系にわたる幅広い分野の15分科会を招き、1・2年生合同で10月上旬に行った。 ・2年生ではキャリアガイダンスの意味合いがもたらされ、職業に対する視野を広めるとともに進路意識を高めることができた。 ・1年生では将来像を見据えた適切な文理選択につながり、学習時間が伸び、課題の提出率も高まり学習意欲へのつながりが確かめられた。 <p>B</p> <p>《進路の実現》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国公立大学合格者数(現役)は、東京大学9名をはじめとして160名を超えたが、センターテスト前に調査した第1志望校に合格した生徒の割合は目標の50%に届かなかった。今年度も昨年度同様に、生徒は「第1志望をあきらめない」精神のもと高い志望をもち全体の52%（昨年も52%）が難関大学または医学部に出願しており、来年再挑戦する生徒も多い。
<p>学校評議員の意見</p>	<p>《大学探訪・進路講演会》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学探訪では、富山中部高校出身の先輩の体験談などを話してもらうことが重要だと思う。 ・ただ行ってみるだけでなく、事前の情報収集を行うことで訪問先の理解が深まると思う。 ・地方創生セミナーは富山県を知る良い機会になると思う。 <p>《進路の実現》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「希望する進路」という表現には含みがあって賛成である。 ・受験問題を解くだけでなく、「何のために何を学びたいのか」を機会あるごとに自覚させていく指導が大切である。 ・まず「大学ありき」では、大学へ入学してから目標を失う人も出てくる。将来何をやりたいかという夢を実現するための進路であってほしい。
<p>次年度へ向けての課題</p>	<p>《大学探訪》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時期をずらして初めて実施したが、悪い面も多かった。情報を共有しながら、良いプランを作っていくことが必要である。東大オープンキャンパスは2日間開催され、学部によって実施日が異なる。視聴できる講義も多いが、それ以上に全国から多くの高校生が参加するため希望する講座に参加できない。希望の学部・学科にこだわらず講義・講座を体験するという姿勢で臨むとよい。安田講堂でも説明会等が実施されているため、入ることが可能である。 ・東京工業大学が前期試験のため、見学不可であった。その他の大学は夏休みに入っており、例年より多くの大学生に講師として参加してもらうことができた。 ・「東大生と語る会」に企業で働く東大O Bにも講師として参加してもらえたら良いと思う。 ・企業等の見学は良かった。東大オープンキャンパスにあわせて、多くの学校が企業見学を

<p>施しており、早めに動くのが良い。</p> <p>《進路講演会》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生と合同となり、実施時期が1ヶ月以上早まった。講師選定と大学探訪の準備の時期が重なり、講師への依頼が遅れ迷惑をかけた。
<p>《進路の実現》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内容や方法、課題の精選、自学用教材の工夫、校内模試のあり方を再検討するなど、大学受験に対応できる学力を段階的に身につけていく指導をさらに研究する必要がある。 ・個々の生徒とのコミュニケーションを大切にし、添削指導や面談のスキルを上げるなど、個別指導の充実をより一層図る必要がある。 ・近年、志望の高さと大学受験時の学力が比例する傾向がますます強くなっている。1年の早い段階から、高い志を持って努力する姿勢を養う必要がある。 <p>評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった</p>

(様式5)

平成28年度 富山中部高等学校アクションプラン		－ 3 －
重点項目	読書指導・体力の向上	
重点課題	①読書指導を充実し、図書館利用の広報周知を行う。 ②体力の向上に努めさせる。	
現状	①生徒には、読書を通じて自らの生き方や社会のあり方などを思索する時間が必要であるが、学校生活が多忙化し、なかなか読書の時間が取れていない状態である。 ①行事が多く、特別授業期間に十分に読書の時間を設定することが困難になってきている。 ②体力の低下が危惧される生徒が増えてきている。	
達成目標	①生徒への読書、図書館利用を促す広報刊行物の年間配布回数及び読書の時間の数 広報活動10回以上 読書の時間 年間15時間以上 (1・2年)	②2年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合 70%以上
方策	○図書広報刊行物を月一回以上発行する。 ○読書の時間を計画的に確保する。また、年2回読書会等を行う。 ○読書教養講座の実施や「本の虫」などの発行をとおして図書委員による主体的な活動を行い図書館への理解を深める。	○全学年、体育の授業時に毎時10分間程度のサーキットトレーニングを実施する。 ○前年度の自己記録を参考に今年度の自己目標を明確にし、体育の授業や部活動等で意欲的なトレーニングに結びつける。
達成度	・広報活動 30回以上 ・読書の時間 1学年 17時間 2学年 21時間	75.7%
具体的な取組状況	<p>《広報活動》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図書委員会の活動と書籍を紹介する特集冊子「本の虫」を10月に全生徒に配付した。また図書委員作成の図書紹介「図書館だより」を年10回発行し教室掲示した。司書作成の「新着本案内」を月2～3回、職員室前と図書館前に掲示した。 ・1学期に読書教養講座、2学期に文化祭企画展（ビブリオバトル）を行い、3学期に図書館誌「富山中部図書館」を発行し、全生徒に配付した。 ・新入生に対して入学直後のLHの時間を利用して図書館オリエンテーションを実施した。 <p>《読書運動》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・LHの中に読書の時間を設定し、担任・生徒と一緒に読書を実施している。 ・8月と12月に、1学年は読書会、2学年はビブリオバトルと意見文作成を行い、そのまとめを図書館誌に紹介した。 <p>《体力の向上》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サーキットトレーニングの意義について理解させトレーニング効果が上がるよう実施した。 	
評価	<p>《読書指導》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全教職員の共通理解のもと、読書指導の充実が図られている。 	

	A	・ビブリオバトルの導入などにより、読書に関心を持つ生徒が増え、図書館利用者・本の貸出数がともに増加している。
	A	《体力の向上》 ・継続して行ってきたことで、トレーニング効果が上がっていることを自覚することができ意欲的に取り組むことができた。
学校評議員の意見	《読書指導》	・読書には個々の生徒のペースというものがある。一律的な量的目標よりも「関心をもって手にとった本」の広さと深さというものさしもあるのではないかと。 ・読み応えのある名作も読書リストに入れてほしい。
	《体力の向上》	・トレーニング効果を自覚させるという取り組み方針は評価できる。成果が出ているので是非継続してほしい。 ・気力・体力の乏しい生徒が多くなっているようなので、せめてまず体力をつけるということも重要だと思う。
次年度へ向けての課題	《読書指導》	・読書離れ・活字離れが大きな問題となっている今、生徒が手軽に本を手にとってくれるような工夫が必要である。 ・読書の時間の本の選定が生徒の実態と乖離し、読書の時間が実効あるものになっていない。知識・教養を高めることはもちろんだが、「読み切った」という達成感も味わわせたい。
	《体力の向上》	・自己の記録、課題を把握し、積極的に取り組む姿勢の育成をはかる。 ・各自の体力に応じて、運動負荷の強度を設定する。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

平成28年度 富山中部高等学校アクションプラン - 4 -		
重点項目	学校行事・部活動の充実	
重点課題	①体育大会をより充実させる。 ②部活動を充実させる。	
現状	①体育大会へのあこがれが、本校への志望理由の一つになるなど、体育大会は、本校最大の行事として知られている。また体育大会を通じて生徒たちは人間的に大きく成長している。 ②全校生徒に対し、いずれかの部に所属するよう勧めている。生徒は学習と部活動を両立させるために懸命に取り組んでいる。	
達成目標	①体育大会に充実感を持つ生徒の割合 *大会終了後に実施する、生徒会アンケート 80%以上	②部活動に充実感を得た生徒の割合 *3年生全員を対象にしたアンケート 70%以上
方策	○体育大会の競技種目や応援の仕方について、生徒会を中心に改善を常にはかる。 ○競技種目の練習や準備活動が行き過ぎないように、適切な指導を行う。	○部活動への参加を積極的に促す。 ○限られた時間の中での効率的な練習や活動を普段から考えさせる。 ○個々の生徒が学習と部活動のバランスが取れるよう、ホーム担任と部顧問が連携を取って指導する。
達成度	96.3%	93.5%
具体的な取組状況	《体育大会》 ・全体練習は10日間、リーダー活動は19日間を設定した。 ・本年度は体育大会を本グラウンド、競技練習は河川敷グラウンドを使って行った。昨年度のノウハウを生かし、スムーズに運営することができた。 ・本年度は第1体育館が天井工事のため使用できなかったため、河川敷グラウンドと第2体育館、第1体育館ピロティエーに加え武道館を使用し、各団リーダーが調整しローテーションを組んで練習場所を確保した。	

	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの伝統を受け継ぎながらも、1年生の団分けや競技参加基準を明確にし、全生徒が公平に参加できるルール作りをした。 ・大会当日や練習時に怪我や事故がないように天候にも細心の注意を払い、また緊急の場合に備えての体制を整えた。 ・保護者の車での上校や入校時刻の制限を行い、大会の円滑な運営を目指した。
	<p>《部活動》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1体育館の天井工事に伴い第2体育館と安野屋体育館の使用のローテーションを行った。 ・全生徒が何らかの部に所属するよう指導した。 ・学習と部活動の両立のため、活動後の下校時刻を遵守するよう指導した。 ・スポーツエキスパート（3人）を招き、部活動の充実を図った。 ・今年度も、週1回担当部活動の生徒が清掃を行うよう指導した。
評価	<p>《体育大会》</p> <p>A</p> <ul style="list-style-type: none"> ・96.3%の生徒が満足しており、ほぼ全員の生徒が何らかの活動に関わり、充実した時間を過ごしたことが考えられる。 ・不満足の原因として部活動の練習時間の不足や学習との両立の困難さをあげる者が多い。 ・昨年度の経験を基に、運営を効率的に行うことができた。
	<p>《部活動》</p> <p>A</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SS部を中心に多くの全国大会に、参加できた。 ・9月上旬に行ったアンケート結果によれば、93.5%の生徒が本校の部活動に満足しており目標は十分に達成している。 ・不満足の原因としては、学習との両立が困難なこと等があった。 ・7限授業や土曜授業、体育大会の練習など部活動の時間が不足している。 ・運動部、学芸部とも活発に活動を行い、多くの部が北信越大会や全国大会に出場するなど成果を上げた。
学校評議員の意見	<p>《体育大会》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が各自の役割を自覚して協力して作り上げるという活動の趣旨に深く賛同する。これからも是非続けていってほしい。 ・人間成長に大きく寄与している行事なので、維持発展を望む。 ・卒業しても思い出に残るすばらしい体育大会だと思う。 <p>《部活動》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習と部活動の両立に悩む生徒の中には「部活動を続ける意欲」が薄れていくという問題も抱えていることがあるのではないかと。教育相談的対応を優先させ本人の選択を尊重していくことが大切だと思う。 ・部活動に積極的な生徒は何かと意欲も旺盛なように思う。部活動が盛んなことはおおいに結構なことだと思う。
次年度へ向けての課題	<p>《体育大会》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・練習中の怪我を防止する方策を引き続きすすめていく必要がある。 ・9月当初に各部の大会が多く、部活動時間の確保の観点からも、運営についてさらに検討を進める必要がある。 ・グラウンドでの練習は天候に左右されるので、雨天時の練習場所や方法を検討する必要がある。 <p>《部活動》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習と部活動の両立に悩む生徒が多いため、学年と各部活動顧問が一層の連携を図ることが必要である。 ・日々の活動における怪我の予防に対し、生徒へのしっかりとした指導が必要である。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

平成28年度 富山中部高等学校アクションプラン		－ 5 －
重点項目	「探究力」・「科学的思考力」の育成、「自己発信力」の育成	
重点課題	①SS事業を計画的に運営・実施する。 ②海外研修により国際交流、学術交流を深める。	
現状	①これまで探究科学科を中心に、野外実習や課題研究等のさまざまな探究活動を通して、生徒の学問的な探究心の向上をはかってきた。本校がスーパーサイエンスハイスクールに指定されたことによって、これまでの探究活動の継続・発展と共に、理数科学科に一層の重点を置いた計画を立てて「探究力」・「科学的思考力」の育成に効果的な指導法、評価法を開発する。 ②語学研修を中心に留学生との交流や先端技術見学等を行うアメリカ研修、平成11年度より継続してきた中国遼寧省との交流、SSH事業として昨年度から実施しているオーストラリア研修を通して、英語力を身につけ英語で自分の考えや意見を伝えたり、相互に課題研究の成果を英語で発表しあう経験等を積むことで将来にわたりグローバル社会で活躍できる「自己発信力」を身につけた人材の育成を目指す。	
達成目標	①-1 野外実習、大学実習に対するそれぞれの満足度 *各実習後に実施するアンケート ①-2 課題研究のルーブリックによる評価	②-1 アメリカ研修参加生徒に対し、研修前後に実施するCASECテストの結果の比較 ②-2 東北育才学校との交流、オーストラリア研修に参加した生徒の充実感及び保護者の肯定感の割合 *帰国後の事後調査によるアンケート
	①-1 各90%以上 ①-2 平均がレベル3に達した生徒の割合90%以上	②-1 研修後のCASECテストで30点以上伸びた生徒の割合 80%以上 ②-2 参加生徒の充実感 各80%以上 保護者の肯定感 各70%以上
方策	○野外実習や大学実習については実習の内容や方法等について十分に打合せを行い、生徒が興味関心を抱き積極的に実習に参加できるよう工夫する。 ○探究活動（課題研究）を3種類のルーブリックを用いて評価する。大学との連携をはかり探究活動が充実した内容となるよう工夫する。	○アメリカ研修では、研修後に再度CASECテストを実施して英語力の伸びを測る。さらに身につけた英語力を生かして積極的に自分の意見や考えを発信できる力を育てるよう研修内容を工夫する。 ○中国、オーストラリア研修では、事前研修を効果的に組み立て相互交流の中で英語で課題研究を発表したり積極的に意見交換を行う等、自己発信力を育成できる研修になるよう工夫する。
達成度	①-1 野外実習（89%：積極的に参加できた） 大学実習（95%：各大学の平均） ①-2 最終（2月上旬）評価の結果 平均がレベル3に達した生徒 78%	②-1 研修後のCASECテストで30点以上伸びた生徒の割合 69% ②-2 参加生徒の充実感 中国 100% オーストラリア 94% 保護者の肯定感 中国 89% オーストラリア 94%
具体的な取組状況	《SSH事業》 ・野外実習では、実習目的を観察力・課題設定力の向上として実習内容を見直した。立山実習では事後指導を1日とり、臨海実習では、2泊3日の内容とした。文化祭で、各班のポスター展示やスライドによる代表班の口頭発表を行った。 ・大学実習では、2年生普通科希望者を合わせて85名（東大30、県立大20、富大遺伝子15、富大薬学20）が参加した。昨年同様に各講座によって1～3日間で実施した。 ・2年生探究科学科の課題研究では、富山大学の教官（13名）から6月と11月に各ゼミの指導を2回、また1月の発表会で評価指導を1回受けた。 ・探究活動の評価にあたっては、生徒によるセルフアセスメント、教員によるルーブリックを用いた評価、さらに生徒との面接の実施や「探究ノート」の評価を取り入れ、適正かつ客	

	<p>観性を高めた。なお、教員は、探究活動、協働、発表会の3種類のルーブリックを用いて評価を行った。</p> <p>《海外研修》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカ研修は、ボストンのタフツ大学の学生寮に滞在しながら、語学演習と最先端の技術に触れ、世界各国の留学生とも交流を深めた。交流は日本、自分を見つめ直すよい機会となり、あらためて自己発信力をつけていく必要性を自覚した。 ・東北育才学校との交流は、今回で10回目を迎えた。ホームステイにより具体的に中国瀋陽の文化に触れるとともにその良さも実感できた。2月の迎え入れ時は八尾の紙すき体験など富山県の文化に親しんでもらうとともに友好関係を築けた。 ・オーストラリア研修は、3月4日(土)～12日(日)に第2回の研修を予定、16名の生徒が参加。現地のパートナー校での生徒同士の交流、研究発表、研究施設での研修やホームステイを通して、積極的に英語によるコミュニケーションを行った。
評価	<p>《SSH事業》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生の野外実習のアンケートでは、「観察力向上した」93%、「課題設定力が向上した」77%と回答している。 ・SSHの生徒の評価アンケートでは、SSHの活動により1年生では、観察力(88%)分析力(90%)対話力(89%)など、2年生では課題発見力(80%)論理的思考力(87%)、3年生では課題発見力(92%)検証力(90%)判断力(90%)などが学年が進むごとに、伸びたと回答している。3年生では、探究力・科学的思考力・自己発信力のすべての項目で伸びたと回答する者が80%を越えており、特に英語での自己発進力(コミュニケーション力、英語表現力、英語発表能力)の昨年からの伸びが顕著である。 ・課題研究に対して行ったルーブリックによる評価では、目標値は達成できなかったものの、78%の生徒が平均レベル3に到達した。 <p>B</p>
	<p>《海外研修》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカ研修では生徒に対する事後のCASECテストで30点以上伸びた生徒の割合は目標値の80%以上に対して、69%であった。 ・中国育才学校との交流は生徒は9名全員が、また保護者も8名が有意義だったと肯定感を持っており国際交流として有意義なものになっている。 ・オーストラリア研修は、ほとんどの生徒が「有意義な研修となった」「積極的な姿勢が身についた」「将来の進路決定に役だった」としており保護者の肯定感も高い。 <p>B</p>
学校評議員の意見	<p>《SSH事業》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先導的な教育活動と評価の取り組みに敬意を表する。生徒の力を存分に引き出す活動として今後も益々充実することを期待する。 ・先生方の指導の苦勞を思い、すばらしい取り組みだと思う。 <p>《海外研修》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語によるコミュニケーションで達成感を味わえるように念入りの事前準備をしてほしい。 ・高校生にさまざまな海外研修の機会が設けられていること自体うらやましい限りだと感じる。
次年度へ向けての課題	<p>《SSH事業》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度より、1年生のSS基幹探究は「探究モジュール」を取り入れた形で行っている。2年生の課題研究へのつながりや、3年生の発展探究βまで見通した指導方法・評価法をさらに検討していく必要がある。 ・ルーブリックは数が増え評価体制が整いつつあるが、客観的評価の確立にはルーブリックの見直しとともに、教員研修等をさらに行っていく必要がある。 <p>《海外研修》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外研修中の実践的なコミュニケーションで、有効に英語力を伸ばすよう意識させる必要がある。 ・短い日程の中で、現地での発表や交流の内容を充実させ、成果として残るように工夫する必要がある。 ・研修で得た体験や自己発信力の伸長を学校生活や将来に生かす指導を進める必要がある。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

